



『OB便り 世界の国からコンニチハ』 第2弾韓国編

国際社会コミュニケーション学科教授 奥 村 訓 代

前回から始まった世界で活躍中のOB、特に海外の大学で日本語教師として働いているOB/OJの紹介も今回が2回目となりました。前回のインドネシアに対し今回は韓国で活躍中の2人を紹介しましょう。1人は、平成12年度人文学部卒業（現在、名古屋外国语大学博士課程在学中）の吉金秀基君（釜山外国语大学日本語科専任講師）、他方は平成14年度大学院人文社会科学研究科修了の公文素子さん（韓瑞大学日本語科専任講師）です。ご承知のとおり、韓国、中国、オーストラリアは日本語教育の熱心な国で、学習者の多い国としても有名です。また韓国の大学で日本語教師をする場合、中国やインドネシアと異なり、最低日本語教育に関する修士以上の学歴が必要です。その意味からいっても、韓国は学習者の学習意欲やレベルも高く、給料も良い国で、生活環境も日本に近く非常に恵まれた環境だといえます。以下に彼らの現状を報告してもらいましょう。

吉金 秀基さん

1. 所属

釜山外国语大学 日本語科 専任講師

2. 指導内容

基本的に会話の授業を担当していますが、1年の前期には発音の授業も教えます。講師によっては作文の授業やビジネス会話の科目を受け持つこともあります。夜間部もあるので、夜間部の会話のクラスを教えることもあります。今までの担当科目は「日本語発音練習（1年）」、「初級日本語会話（1年）」、「初級日本語会話（2年）」、「中級日本語会話」、「高級日本語会話」などです。

全体の学生数が多いので、一つのクラスの人数も多いのですが、こちらの大学では基本的に会話のクラスは最大30人までとなっています。また、専攻を二つ取る「複数専攻」をすることができるので、日本語科の学生だけのクラスもあればそうでないクラスもあり

ます。それらさまざまな学生の集まつたクラスで、初級では文型練習や会話練習をさせたり、上のレベルのクラスではペア会話やグループ会話、発表やディスカッションなどをしてもらったりしています。

3. 感じること・発見

釜山は九州の福岡まで船でも3時間という距離なので、韓国の中でも日本語を学習している人が多いと思います。デパートなどはもちろん、市場や食堂などでも日本語ができる人々が大勢います。学生たちも学院（日本の語学学校や塾に相当するもの）などで勉強したり、日本の学校へ留学したり、ワーキングホリデーで日本の生活を体験してきている人もいたりするので、初級のクラスでもかなりのレベル差があります。そういう点には注意しなければなりません。

また、釜山の方言は日本語のイントネーションに近いものがあって、上手な人はかなり自然な感じで日本語を話す人もいます。加えて、韓国語は漢字語彙などが日本語と共通するものが多いので、初級の段階でもかなり上手に話すことができます。ですから、教師としては細かな違いに気を配らなければいけないと思います。

そんな中で、最近おもしろかったことは、釜山出身ではないのですが、日本のアニメ・音楽・ドラマなどに興味があって、それらを見たり聞いたりしているうちに、まったく勉強していくのにもかかわらず、自然に日本語が分かるようになったという学生がいたことです。ひらがなもまだ十分にできなかったのに、日本のアニメやドラマを字幕なしで見て、ほとんど理解していたそうです。やはり、「好きこそものの上手なれ」ということなのでしょうか。



公文 素子さん

1. 所属

韓瑞大学 日本語科 専任講師

2. 指導内容

会話、初級日本語

日語会話 I・II - 日本語科 2年生 90分の授業を週に2回 学生数53名 (2006年度前期)

日語会話 I・II - 日本語科 2年生 (夜間) 90分の授業を週に2回 学生数20名 (2006年度前期)

* 学生数が多く、日本語力も様々なため、新学期最初の授業でプレースメントテストを行い、2クラスにそれぞれ分けています。

* 学生数やクラスの雰囲気で授業内容を決めています。例えば、2006年度前期の授業では、履修生が多く、集中力を持続させたり、退屈させないために特定の教科書を決めず、ビデオや会話テープ、クイズ形式の問題、漫画などを使って授業を行った。

大学日本語III・IV - 国際関係学科・国際通商学科 2年生 140分の授業を週に1回 学生数17名 (2006年度前期)

* 2006年度の前期授業では、韓国の日本語学習者がよく間違える表現やあやふやになっている部分を中心に分野別のプリントなどを使って、授業を行った。

大学日本語会話III・IV - 国際関係学科・国際通商学科 2年生 140分と90分の授業を週に1回ずつ 学生数7名 (2006年度前期)

* 昨年に続き、このクラスでは教科書を決め、場面別 の日常会話を主に学習している。

TOJAFL I - 教養11学科の学生 25名 (2006年度前期)

* 初々級の学生が中心で、教科書の他にカードや絵、写真、プリントなどを準備し、リズムのある授業を心がけている。

3. 海外経験で学んだこと

韓国での日本語教師生活も今年で3年目に入った。日本では、ゼロに近い日本語教師経験での韓国行きに「韓国の日本語学習者は日本語がよく出来るから、覚悟して行け」と言われ、少し不安な気持ちで入った教室も今では少しリラックスした表情で授業に向かう。

授業の回数を重ねるごとに、「このクラスでは学生の反応はよかったのに、このクラスではどうしてうまくいかなかったのか……」と反省し、試行錯誤を重ね、クラスや学生ごとに教授法や学習方法が違うことを身を持って感じ、日本語教師としての力量が試されていることを実感する。また、海外での日本人日本語教師には、ただ日本語を教えるだけにとどまらず、時代や学習者に応じた教材選定と作成、そして、海外では不十分になりがちな日本の情報を学習者にできるだけ詳

細に伝え、学習に活かすなど、日本人日本語教師としての役割の大きさを感じている。韓国では、インターネット環境が充実しているため、特に日本のドラマやバラエティー番組がほぼリアルタイムに近い状態で入ってくる。しかし、学習者が日本や日本語を勉強する上で必要な生活習慣などの情報は限られているのが現状である。今後は、学習者にとって身近なインターネットを利用して、ドラマやアニメ、漫画などから、現代の日本の社会問題や生活習慣などを取り上げて、授業を展開していくと考えている、そうすることにより日本や日本語理解に繋がることを願っている。

また、多くの人と関わる中で、「判断の基準」や「視点」が、常に各人の「基準」によって判断されていることに改めて気づいた。国や人種に関係なく、多くの人々との交流から、常に様々な視点から物事を判断しなければ誤解が生じ、異文化理解、相互理解に繋がらないということを学んだ。このような経験が、様々な国の学習者を相手に日本語を教える日本語教師には必要なことであると痛切に感じている。今後は、日本人と接する機会の少ない学習者にも異文化理解、相互理解に繋がるような交流の場を提供していきたいと考えている。

韓国での日本語教師生活では、日本人日本語教師の役割の大きさや異文化理解、相互理解について学び、今後もそれらと向き合い、海外から日本を客観的に見ることによって、自文化や習慣、社会を再認識し、日本や日本語のよさを学習者に伝えていく努力をしていかなければならないと感じている。

最後に二人から後輩へのメッセージをお願いします。

吉金：日本語教師は、毎日が未知との遭遇です。異文化や多文化に触れながら自分が成長していくのが実感できます。まじめに日本語教育に取り組んでくれる後輩が、今後も母校高知大学からたくさん輩出されることを期待しています。

公文：「求めよ。さらば与えられん！」これは奥村先生の受け売りの言葉ですが、この言葉を信じて韓国でがんばっています。海外から日本を冷静に見るのもなかなか乙なものです。非常に考えさせられることが多い。でも、どこにいてもはっきりしていることは、自分から求めないと何も物にならないということは、世界共通のようです。

以上、今回は韓国編をお届けしました。

在学生やOBの皆さんにとって、よりよい情報がお送りできることを楽しみにしています。次回は第3弾として、『アメリカ編』をお届けする予定です。ご期待ください。(人文学部日本語教員養成課程教授)